

「被引浮体における安全対策の実態と課題」

1914022 鈴木 早彩 (海洋スポーツ・健康科学研究室)

I. 研究目的

運輸安全委員会の発表によると、近年被引浮体に関連する事故数が増加しており、浮体からの落水や接触事故が原因の死亡事例も報告されている。そこで本研究では、過去の事故事例を分析し、事故の原因や保護用具の有無等について整理するとともに、事業者における被引浮体の安全対策の現状や一般人の被引浮体に関する経験や意識を把握することにより、被引浮体の安全性を向上させる方法について考察することを目的とする。

II. 研究の方法

①運輸安全委員会(JTSB)が発行している船舶事故報告書において、「浮体」というキーワードでヒットした事故 98 件のデータを収集し、整理した。②被引浮体を用いた事業を運営している事業者にアンケート調査を行い、安全対策の実施についての実態を調査した。③一般人 100 人を対象として被引浮体に対する経験や意識を尋ねるアンケート調査を行った。

III. 結果と考察

98 件の事故の分析において、運転者以外の見張り役の有無については、88 件(89.7%)が「無」という結果であった。また、事業者から得られた 14 件の回答のうち、実施している安全対策項目について「見張り役を同乗させる」を選択したのは 2 件(14.3%)のみであった。一般人の回答者のうち、浮体搭乗経験のある 41 人に対し、「どのような対策があれば恐怖や不安が軽減されると思うか」と尋ねたところ、「乗る前にけん引者と意思疎通の合図を決めておく」と「常に搭乗中の自分の様子を確認してくれる」という項目が最も多く、18 人ずつ(43.9%)であったことから、見張り役の搭乗は浮体搭乗者の不安を取り除き、より安全に楽しむことにつながると考えられる。

また、ヘルメット等の保護用具に関しては、事故の分析では着用していたという例が 1 件もなく、一般人の着用経験についても「(着用)していない」と回答した者が 30 人(73.2%)であった。さらに事業者についても、救命胴衣は 14 件全ての事業者が着用させていたが、ヘルメット等の保護用具を着用させていたのは 2 件であったことから、着用率は低いということが明らかとなった。保護用具を装備することは重大な事故の予防につながるため、トーイングを行う際の保護用具着用の重要性を、より浸透させるべきであると考えられる。

IV. 結論

本研究では、事故の分析やアンケート調査によって、トーイングを行う際の見張り役の搭乗や保護用具着用の重要性が明らかになった。トーイングを安全に楽しむためには、これらの重要性を周知し、現場での実施について徹底をはかることが重要であると考えられる。

主な参考文献

運輸安全委員会(2019)「運輸安全委員会ダイジェスト」,第 32 号